

# 模擬授業研究会の斉藤メモ(2019年12月4日)

授業者：〇〇

範囲：世界の貧困問題

## 主な感想・代案

- 貧困問題に関して、生徒に導入で関心をひきつけつつ、後半に課題解決策や提案を促すような授業となっており、授業者の工夫も感じられました。生徒と対話しようとする意志のようなものが強く伝わってきたのが印象的でした。
  - 導入で個人の視点から入り、後半で政策的な提案になっている点に関しては、研究会などでも論点となると思いますので、言及しません。
  - 私が〇〇君の授業に対して思うことは、貧困問題ほど解決の難しい問題はないということ、そして、その難しさを生徒に感じさせる授業になっているのかどうかという点です。素朴に思うのは、私たち自身が「貧困問題の解決策は、国連を中心に行われているが、自分たちにもできることがあるということ」(検証シートの優先順位の中核部より)を実感できているかどうかという点です。おそらく、これは言うは易く、実感するのはなかなか難しい論点だと思います。貧困問題はその原因分析をメインにさせる授業の方がおそらくやりやすく、その解決策を考えさせるのは難しい。なので、解決策を考えさせる授業には相当な工夫がいります。
  - そういう意味で言うと、今回の〇〇君の授業が生徒役の知識や意見に任せすぎな構成のようにも感じました。前時で学んだ知識を前提にするよりも、もう一步配慮した工夫が欲しかった。そういう意味では、教科書にあるような貧困のウェビングマップから解決策を吟味させる方が現実的な印象を持ちます。
- 主に途上国での貧困解決の問題は、援助する際に私たちが何を優先して考えるべきかという論点とも関わってきます。例えば、お金を送るべきか？食料を送るべきか？家を建ててあげるべきか？技術を伝授すべきか？村づくりに関わっていくべきか？などなど。これらの選択肢は「援助」と一口に言っても、その関与の仕方が大きく異なります。このような関与のレベルの違いを意識させたい。
- 私ならば、先の？の選択肢をあらかじめ出したうえで、短期的な効果と長期的な効果を両サイドに出した両矢印を示し、それぞれの援助方法がどこに位置するかを考えさせます。その上で、誰が動くとその問題が解決しやすいかという「主体」の視点を自覚化させたい。具体的には主体は、「国連」か「日本」か「個人」か「そのほかの集団」か。一口に貧困問題といっても、その性質によって、協力する集団やアプローチが変わってくるということを実感させたいと思います。

## 【コラム】理論と実践の接点

学習指導要領などで「深い学び」という言葉がキャッチフレーズのように使われていますが、(その賛否は置いておいて、) その言葉の背景として重要な考え方は「知識のネットワーク化(構造化)」という認知心理学的な考え方です。知識Aと知識Bと知識Cを活用して、学習者の中にその知識同士のネットワークを作り、アウトプットさせる。それを促す授業が求められています。例えるなら、「徳川幕府は、どのようにして地方の大名を従わせたのだろうか」という問いに対して、武家諸法度、大名の配置、参勤交代、の三点を学習者自身が関連づけて論じさせるようなイメージです。この例だと正解がややあるような印象もありますが、重要なのは、知識A、B、Cをうまく活用すれば何らかのアウトプットを出来そうだという見通しを授業者側が持つておくことにあります。そういう点では〇〇君の授業は、そういった知識のネットワーク化を意図的に促そうとする工夫がやや薄い印象を持ちました。

【参考文2】田村学(2018)『深い学び』東洋館出版社。

# 模擬授業研究会の斉藤メモ(2019年12月4日)

授業者：〇〇

範囲：司法制度

## 主な感想・代案

- 教材づくりや練習に時間をかけたのだろうということは伝わってきました。単なる詰め込みの授業にならないようにと、授業者なりに工夫をしていたことも感じられました。
  - 今回の授業に関しては、感想レポートでの提案が豊富なので、具体的な提案を私からはしません。
  - むしろ今回の〇〇さんの授業に関して論点して私が提起したいのは、知識の習得を重視した授業において、〇〇さんの授業はどうだったのかという点です。感想でも挙がっていたように、導入・主発問と展開部のつながりが弱い点や、展開部で生徒が頭を使うようなタイミングがほとんどないことは指摘できると思います。ただ、それではいけないと主張する理由は何なのでしょう？文科省が対話的な授業を推進しているから、という理由ではあまりに弱い。実際、テスト対策になりさえすればそれでよいという人もいます。そういった意見もある中でどう答えるかが重要となります。
- 私の考えを話します。前提として、(知識的な意味での)テスト対策に耐えうるような知識習得のレベルを各授業に求めるのは無理があると思います。なぜなら、人は忘れてしまうからです。結局のところ、テスト前に自力で覚えなおさないといけない部分はどうしてもある。ただ、そういった点を含めて、先のことを考えても押さえておきたいのは、「知識を関連付ける工夫・仕組みの提示」と「その内容を学ぶ意味を強調する工夫」の二点かと思います。
- 前者に関しては、難しい話をしているわけではなく、三審制や民事・刑事のちがいなどについて、個別の知識を生徒が関連付けて教えるためのサポートを指します。教育心理学でいうところの「連合記憶」をするにしろ「エピソード記憶」をするにしろ、個々バラバラの知識を人は機械的に覚えることができません。その個別の知識を関連付けられるような例え話であったり、個別の知識を関連付けられる時間を設ける必要があります。その点がこの授業は弱かった。私であれば、「なぜ民事と刑事で対応が違うのか？」を視点に考えさせ、両者の制度の違いに正当性があることを説明することを通して、各仕組みの知識を関連づけさせます。
- 後者の「その内容を学ぶ意味を強調する工夫」が必要なのは、「教科の意味・目的を問うべき」といった高尚な理由ではなく、単純に、その学ぶ意義が理解できないと、記憶としても後回しにされて忘れてしまうからです。その後も頭に残るような「探究のスパイラル」に全く入らないので、結局、テスト前に慌てて覚えるだけになる。そのため、なぜ三審制について知るべきかを教師自身が語らないといけない。幸い、この授業は、冤罪を防ぐために制度がつけられていること、ただその制度が完全ではないこと、を指摘しやすい内容になっていると思います。
- おそらく、そういった考えさせる時間はないし、それよりも知識を正確に教えた方が良くと授業者は考えているのではないかと思う。ただ、上記の二点の工夫を怠ると、結果的に忘れてしまうのではないかというのが、私の個人的な意見です。

## 【コラム】理論と実践の接点

どうすれば、知識を覚えられるか、テスト対策になるのかななどの論点は、単に一授業のみで語れるものではなく、学習者にどういった学習習慣をつけさせるか、方向付けを行うかという点に関わってきます。最近「自己調整学習」という言葉が研究界隈で出る機会が増えてきたのですが、生徒がテストや何らかのゴールに向けて、目標を達成するためには、何を準備すべきかについて、改めて考える必要があります。

【参考文献】自己調整学習研究会編(2012)『自己調整学習：理論と実践の新たな展開へ』